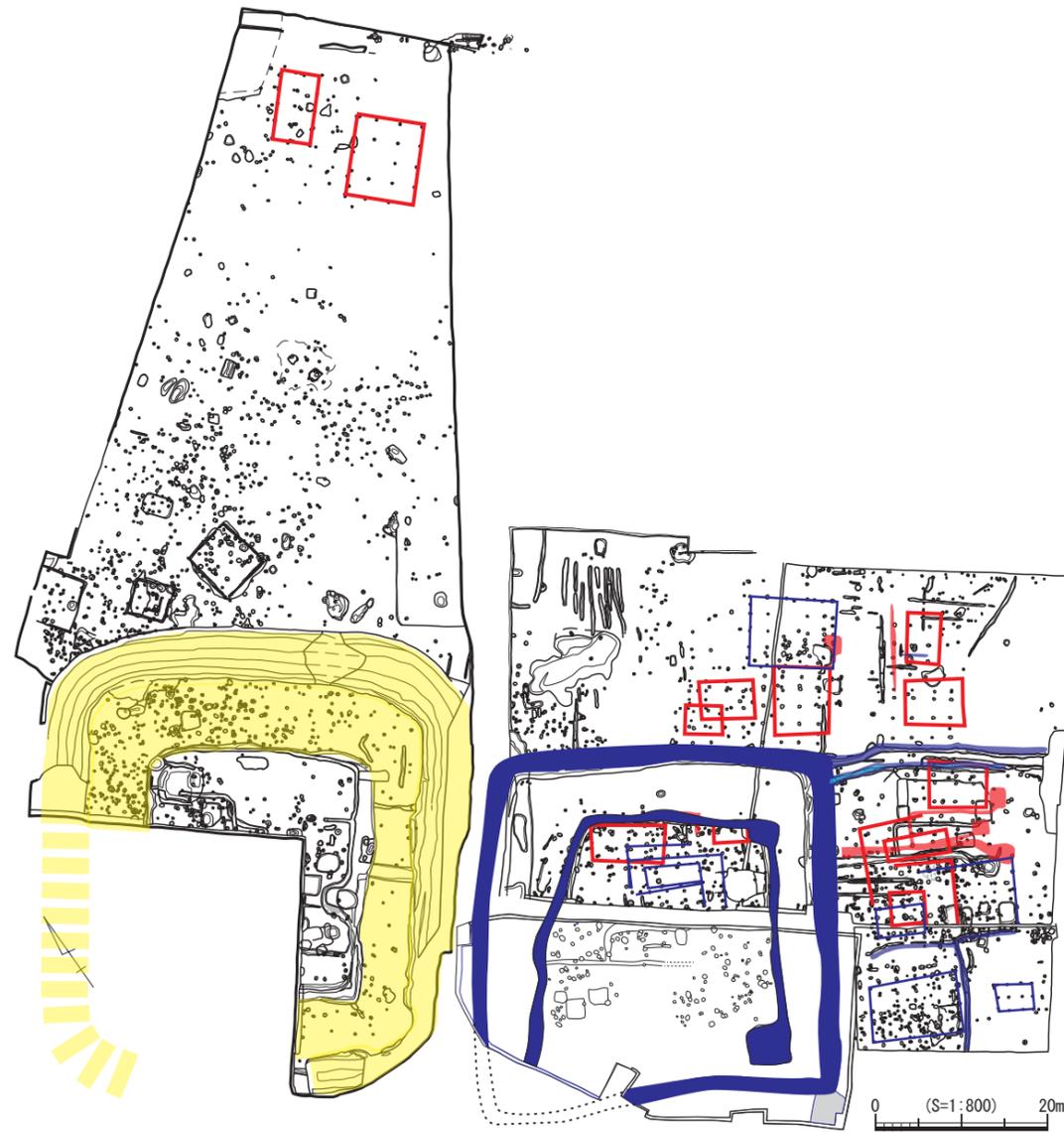


貴生川遺跡第4次発掘調査



写真1 東方向から調査区全景(人のいるところが溝)



第3図 遺構変遷図

第1段階 平安時代末～鎌倉時代

この時期は、建物と建物との間に明確に区画する溝はなく、排水用の溝だけが存在します。領主の居館と考えられる建物は明確ではありません。

第2段階 鎌倉時代～室町時代

この段階で、方形居館が出現します。方形居館と同時期の建物が方形居館の外側で見つかっているため、領主の屋敷と一般庶民(もしくは家臣)の家を明確に区別するために溝で囲まれたと考えられます。

第3段階 戦国時代～安土桃山時代

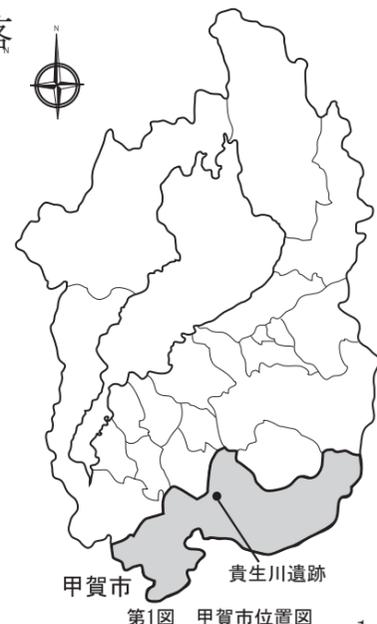
前段階の方形居館よりも、堀と土塁を備えた防御施設が強化された城館が造られます。いわゆる甲賀特有の単郭方形居館です。

貴生川遺跡とは

貴生川遺跡は、甲賀市水口町貴生川に位置し、鈴鹿山脈の油日岳を源流とする市域を東西に流れる柚川の河岸段丘上に形成された遺跡です。

これまでの調査で、古墳時代中期の竪穴建物、平安時代末から鎌倉時代にかけての掘立柱建物・柵・溝・土坑、安土桃山時代の城館が見つかっています。その結果、貴生川遺跡は古墳時代には竪穴建物を中心とした集落が栄え、その後、平安時代末から鎌倉時代には掘立柱建物を中心とする集落が現れ、その中に溝で囲まれた屋敷地も出現します。さらに、安土桃山時代に入ると平安時代末から鎌倉時代の屋敷地に隣接した場所に半町四方(一辺約50m)の堀と土塁に囲まれた単郭方形の城館が造られました。城館の内部では、井戸・土坑・溝などが見つかっています。

このように貴生川遺跡は、古墳時代から中世にかけての甲賀の集落の様子がわかる貴重な遺跡です。



第1図 甲賀市位置図

見つけた遺構

ほうけいきょかん 方形居館

過去の調査で北半分が見つかった屋敷地の南半分を、今回の調査で確認しました。その結果、屋敷地は四方を溝で囲まれた一辺約40mの方形居館であることがわかりました。さらに、内側にはもう一つ溝があり、居住空間は約25m四方であったとみられます。ここには、掘立柱建物や建物を区画する溝が見つっています。溝と内側の溝の間には、溝を掘った時に出土した土を盛った土塁状の構造物があったと考えられます。

屋敷地を囲む溝

溝・・・方形居館を囲む幅約1～1.5m、深さ約0.7～1mの溝で、居館と外部を区画しています。

内側の溝・・・屋敷地内の排水用とみられる溝です。幅約0.5～1mで、深さ約0.2mです。

しゅつどいぶつ 出土遺物

遺物は13世紀～15世紀のものが多く出土しました。13世紀の遺物は、瓦器や土師器の皿、中国製青磁の椀、常滑焼、東播系須恵器などがあり、中でも瓦器と土師器の皿が大きな割合を占めています。14世紀～15世紀の遺物は、信楽焼の壺・甕・播鉢が多く見られます。



写真2 調査区東側(左から溝、内側の溝、居住空間)



写真3 溝(東西方向)の断面

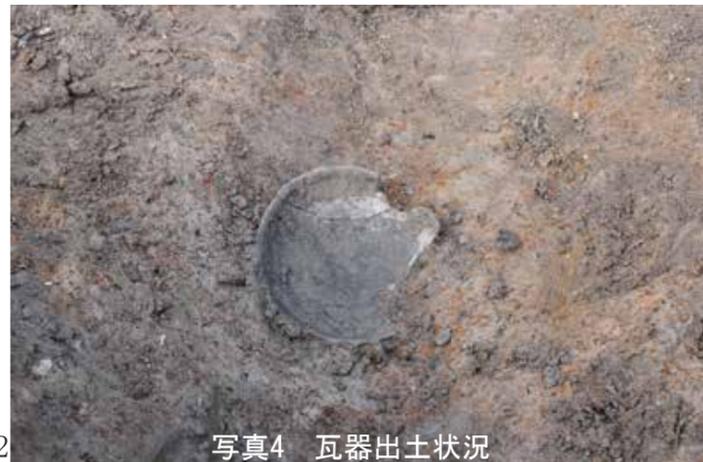
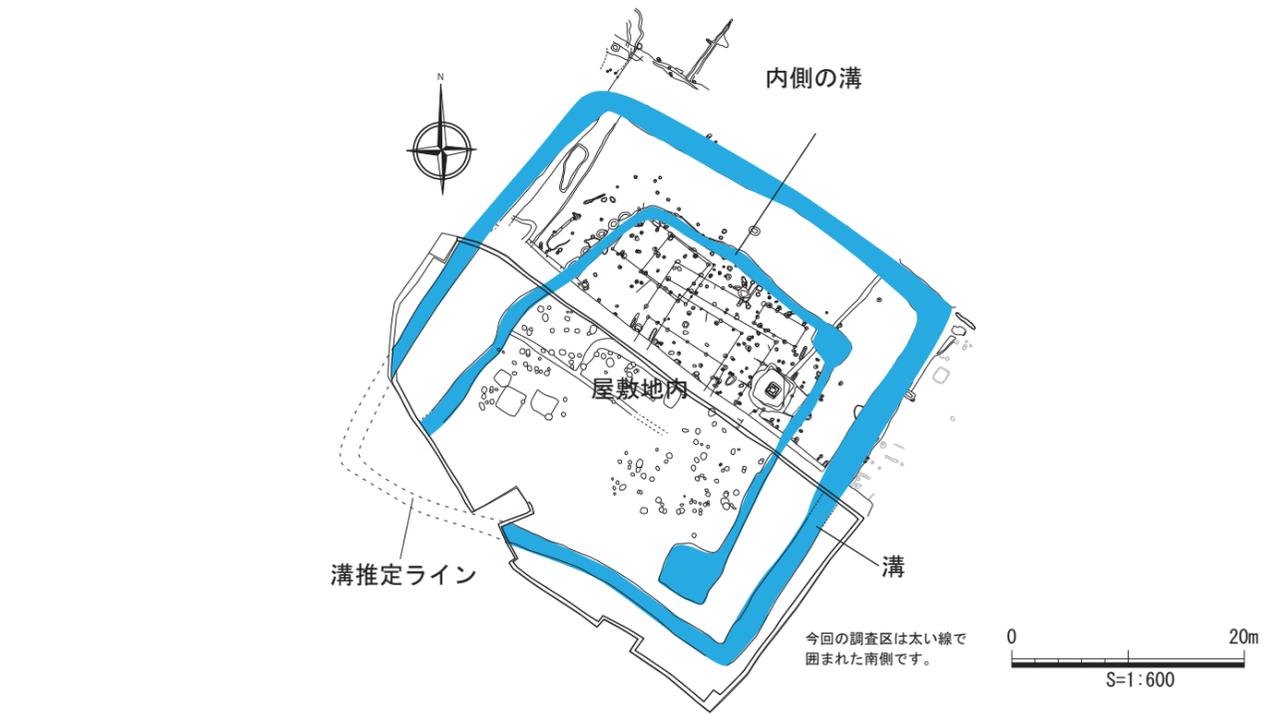


写真4 瓦器出土状況



写真5 信楽焼出土状況



第2図 方形居館模式図(1:300)

今回の調査でわかったこと

(1) 鎌倉時代から室町時代にかけての方形居館を発見!

今回の調査で全体が明らかとなった方形居館は、13世紀にのみ機能していたのではなく、15世紀まで溝は存在していたことが明らかとなり、これまで空白期間であった室町時代にも、この溝が機能していたことがわかりました。

(2) 居館から城館への成立過程を明らかにする手がかりを得た

今回とこれまでの調査成果から、貴生川遺跡では、平安時代末から安土桃山時代にかけての3段階の変遷が明らかとなりました(第3図)。中世の村から溝で区画した方形居館、堀と土塁を備えた城館への移り変わりは、甲賀地域の中世から戦国時代という動乱の時代の中で、屋敷がより防御を重視した城館に発達していく過程を反映していると推定されます。



写真6 柱痕出土状況



写真7 溝(西側)完掘状況